
となりの司書さん

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりの司書さん

【Nコード】

N6154X

【作者名】

ゆさ

【あらすじ】

大陸随一の蔵書量を誇るシュトラーフ王国国立図書館。そこで毎日奮闘する司書と、図書館目当てで戦を仕掛けてくる他国とその司書との攻防。

そんな壮大なるお話になる予定。

＊警告タグは念の為です。

シュトラーフ王国国立図書館へようこそ。

わたくし、シュトラーフ王国文学院国立図書館研究部司書課所属のセシル・アルマンと申します。今回企画された図書館見学体験の案内人として、このシュトラーフ王国国立図書館の歴史や貴重な蔵書を……。

ええ、はい？ 挨拶が固い、でございますか。

まあ、要するに、皆さまの案内人と仰せつかっています。

仰せつかるって何、でしょうか。は、はやくしろ？

それでは、さっそく参りましょう。まず、最初は……。

ああ、お待ち下さい、そちらの通路は立ち入り禁止でして、お客様。

「館長！ 私もう疲れました。次回はハロルドに押し付けて下さい。彼、暇ですよ。館長及び司書長命令で、ちゃんと印章を押してくださいね」

日中から開催された図書館見学体験大会は、陽も傾き始め燭台に灯がともされた頃によりやくおひらきになった。

案内人とは、なかなか骨が折れる仕事だった。

本が恋人、なんて公言するつもりはないけど、自由気儘に動き回る参加者達の統制を執るのは至難の業だ。

今は、その内容と反省点をまとめて報告書を作り上げている。

国王陛下たつての希望で立案されたこの企画は、文学院も様々な理由をつけて渋っていたようだ。けれど、それに煮えを切らした陛下は、侍従に館長宛の書面を持たせ直接交渉をはじめたのだ。

文学院をすっ飛ばしているけど、勅命とあらば館長も断れなかったのだろう。うん、きっとそうだ。館長室に転がっていた年代物の葡萄酒の空き瓶なんて、この目に焼きつけてはいけない代物だ。

「ハロルド？ ハロルドなら今日付けで退職したよ。他に良い職が見つかったそうだ」

「退職って。私、そんな話聞いてませんよ。あらでも、言われてみれば、この一週間はハロルドを見てないかも」

「うん、そうだね。僕も、今はじめて知ったんだよ」

ペンを走らせていた手を止めて、ほら、と差し出された封筒を受取る。裏書を眺めて差出人を確認した。

「署名はハロルドですね」

運び屋さんの預かり日のスタンプはと。

「うん、一週間前に届いたみたいなんだけど、僕も忙しくてさ」

そうですね。先週は財務院の方とお隣の国立図書館の視察と本の買い付けで、一週間不在でした。その間に、各部署から届けられる書類が溜まっていくばかりでしたよ。兼任で館長代理もしているから私が決裁しても良かったんだけど、ちらっと見たらどれも文学院の抗議と始末書の催促ばかりだった。だから放置した。だって、侍従さんとのやり取りなんて知らないし。

でも、お掃除のおばさんには、手紙箱の手紙は私に持ってくる様に伝えたんだけどな。忘れてしまったのかな、まあしょうがない。

「読んでもいいよ」

「……国王陛下発案なんて、ろくなもんじゃない……」

ガタと椅子を倒しながら、私は勢いよく席をたつ。

「うわあ。ああっ、インクのビンが、書類が」

あ、館長ごめん。

向かい合った机に振動が伝わってしまったらしく、慌てる声に視線を動かすと、倒れたインクの瓶から液体が吐き出されている。しかし、それには構わず、倒した椅子もそのままに事務所を飛び出す。

「今から、連れ戻してきます！ 私が戻ってくるまで、ここに居てくださいね」

「へ、あ、うん？ あ、セシルー、夜分遅いから、ご近所さんに迷惑掛けちゃダメだからねー」

館長の声が、閉館した図書館内に響いた。

やあ、僕はアルノルト・ラングス。シュトラーフ王国国立図書館の館長だよ。

ところでさ、その君。そう、君。

僕の疑問に答えてくれかな。いや、自分でも考えるには考えているんだけどね、なかなか答えが出せなくてさ。同僚に聞くのは、なんだか気が引けてね。

ほんとう？ 良かった、ありがとう。

そうそう、ええとね。なぜシュトラーフ王国『国立』図書館って言うのかな。

ここは王国で王様が建てた図書館なのだから、王立となるのが普通だと思うんだよね僕。

知るかそんなもん、だって？

そう……。ああ、困ったな。また眠れなくなりそうだよ。いや、目は覚めていたほうが僕としても助かるんだけどね。ほら見ておくれよ、この書類。すごいだろう？

ああそうだね、これだけあれば目の神経も疲れて眠たくなるだろうね。

君も、そろそろ眠りにつく頃合かい？

そういえば、彼女は何時になったら戻ってくるのだろう。

ああ、ヒツジが一匹、ヒツジが二匹。

君が呑み飽かした酒瓶。ふわふわなタオルを一枚掛ければ、ほらこのとおり！ 僕の枕にピッタリだよ。

ヒツジが五匹、ヒツジが七匹……。

うん？ 三と四と六が抜けているって？

あー、ほかあ奇数が好きなのだよ。まあ気にしないでくれたまえ。では、おやすみなさい。

「ハロルド。ハロルド・マレット!」

時刻にして宵の口。たそかれ時はとうに過ぎて、家々に灯る明かりを頼りに目的地へと到着する。ちゃんとハロルドの住まいの部屋番号を確認してからノックをした。

最初は丁寧に。

二分後は、少々きつめに。

三分後には。

「私の脚力を舐めるんじゃないわよ。こんな薄っぺらいドアなんて、蹴破ってやるんだから!」

いまだ応対する様子の無いハロルドに警告という名の脅しを試みてたけれど、この扉の向こうには物音一つ聞こえやしない。

この時間帯だから、新しい職場の仲間達と酒場で一杯引っ掛けているのかしら。それならまだ帰宅していいのか。それとも、もう寝てしまったのかしら。ならばノックだけでは起きないのかもしれない。

酒場に行こうか、ドアを蹴破るか。さあどっちにしよう。

「……………さん、勇ましいお嬢さん」

「は、はい? 私?」

ふと気付けば、左隣のドアの隙間から顔を覗かせる妙齡の女性が、私のことを不審そうに見つめていた。

「ええそうよ、お嬢さん。私は、ここの大家なんだけどね。ハロルドなら、一昨日ぐらいに出て行ったよ」

「出て行った？」

「ああ。だから、蹴破るのは止めといたほうがいいね。まだハロルドが居ようなら、奴に修理代を締め上げるけど。なんなら、確認してみるかい。お前さんが弁償してくれるなら、したい様にすればいい」

よっころしょと、重い腰をあげるかの様に歩み寄ってきた。

「あら蹴破るなんて……、ほほほ。こ、言葉のあやですわ。冗談というか、そうウソツ、嘘なのですわ。は、ハロルドはきつく言わないと仕事をしないから、それで……」

ああ、私の背中になにか冷たい物が伝わり落ちて行く。

「……ふんっ。あたしはどっちでも構わないけどさ。だけでも、ハロルドがいなのは本当さね」

ああ、駄目だ。大家さんの不審を解く事ができなかった。

「あの、どこに移るとか聞きませんでしたか」

さあね、と左右に首を振ってくるりと背を向けてしまった大家さん。これ以上何かを聞く事は無理みたいだ。

「あ、ありがとうございます」

部屋の中へと戻っていく大家さんに、私は慌ててお辞儀をした。

おお、突然の召集にも関わらずよく来てくれた。礼を言う。

さあ座りたまえ。なに、遠慮はいらんよ。

今日は、先の見学会の感想を聴きたくてね。見たままの事でも、あの場所を感じた事でも何でも構わない。ああ、言葉使いも普段通りで良いぞ。

私のことは、そうだな、街中の茶店の亭主だと思えばいい。なんたって彼らは優秀な情報屋でもあるからね。少し違うとすれば、彼らは地域に根付いているが、私はシュトラーフ王国に根付いている。ただそれだけのこと。

おっと、これはいけない話が逸れてしまったかな。ああ、茶店といえば飲み物と軽食が必須だな。侍従よ、今すぐ茶と茶菓子を用意をしてくれ。

さ、茶が来るまで少し話をしよう。うむ、では窓側にいる貴殿から。そうか、案内人の態度や口調が気に入らなかったか。それは、私にも責任があることだな。私も詫びをいれる。すまなかった。何しろ文学院の抵抗にあったな、予算がどうのこうと。だから、直接交渉したのだよ。まあ、その事もあって準備期間が足りなかったのだろう。今度からは、文学院に会を起こして、彼らの主張も採り入れながら事を進めよう。

では、隣りの。

ん？ 少しだけ恐ろしかった？ それはどういう……。図書館内で泣き声を聞いた、とな。ふむ、いやはや小さなお嬢さんは司書の能力が備わっているようだね。将来、とても優秀な司書になるであろう。今は怖い体験かもしれないが、君はあの本達の気持ちを読み取れている。なに恐れる事はない。お嬢さんは、ここいる誰よりも本に望まれているということだよ。

おお、茶の用意ができた様だ。さあお嬢さんどうぞ。

皆の者も好きなだけ食してよろしい。では、続きを聞こう。

□
□
□

ハロルドの借家を辞してから、酒場に赴き主人や客達に何か知っていないかと聞いて回ったが、たいした情報はなかった。そして、料金代わりに幾度も尻を触られた。それだけならまだ良い。テーブルの間を縫うように通り過ぎる私を見て、まるで輪唱の様にため息をつく客達。

なぜ？ 後方の尻には必ず手を触れるのに、どうして前方には悲しみの様な残念そうでいて憐れみの様な視線がふりそそぐの！ もう二度と来るかっ。

次は高級酒場に聞き込みに行こうか。ただ、あっちは高級なだけあって、知りたい情報が思うように手に入らないのよね。信用第一というか、それはどこでも同じだけど、矜持というものがあるらしい。

仕方ない、今日の所は引き上げよう。ハロルドの手紙に気付かなかった私も悪い。せめて館長不在時だけでも書類の確認をしよう。抗議書は館長に押し付けるけどね。

さあ、家に帰って蒸しタオルで身体を拭ってさっぱりしよう。

私の家は、ハロルドの家や酒場のあるこの区画からは橋を渡った反対側にある。一旦図書館前まで戻り、それから通いなれた道を進む事にした。

□
□
□

「セシルー、ひどいじゃないかあ」

「あら、館長。おはようございます。……なぜ泣いているのですか」
館長。大の大人なら、もっとしゃきつと背筋伸ばしてください。あ

あもう、服も埃がついてよれよれじゃないですかっ。というか、涙でぐちゃぐちゃな顔で迫ってこないで。

ポケットから携帯用のブラシを取り出して、館長の周りを一周しつつ肩口や背中 of 埃を取り払った。

身嗜みも重要なんですからね。これからは、館内の書棚や床だけでなく、服の皺まで気を遣わなければ。お掃除のおばさんの仕事ぶりだけでは足りないのかもしれない。

「それで、何がひどいのですか？」

「うう、セシル、忘れているでしょ。僕、一晩中君の帰りを待っていたのにい」

「私の帰りを？ それまた、なぜ？」

「ひどいー、やっぱり忘れてるじゃない」

えぐえぐと、何時までも泣き止みそうに無い館長を押しやって、大扉の鍵を開錠し、ブラインドの開け閉めを行う。

ブラインドの開け閉めは、陽の昇りと時間帯による傾きによってあたる日光から、書物を守るために行っている。日中でもランプは灯しているけれど、利用者にはなるべく自然光の中で読んでほしい。だいたい一時間毎に、その閉め具合を調節しているのだ。

「ほら、館長、早く涙を拭いてください。できれば顔もすすいで。早くしないとお客さんが来ますよ」

「冷たいよー。ああ、国王陛下。僕は、セシルの優しさを感じられないよう。なんで彼女は、君に従順なのに、僕には優しくしてくれないの」

麗しの国王陛下。近頃の館長は鬱陶しいです。

ぐずるのを諦めたのか、しおらしくお手洗いへ向かいはじめた館長。しかし三歩くらい進んで、一歩引返す。

「そうだ、セシルは知ってるかい？ 書棚から泣き声がするんだってね。御意見箱に投書があったのだけれど」

さ、私は昨日の報告書の続きを。

「じゃあ、僕は顔を洗ってくるから。心当たりがあったら、あとで

教えてね」

ふうん、そうですか。

「……って、はい？」

よっと。悪いな、爺さん。相乗りさせてくれて、ありがとよ。

俺はハリーっていうんだ。ああ、隣りの国の出でだよ。俺、どうしても司書になりたくてこっちに来たんだけど、現実っていうのは大違いだな。笑ってしまおうほどさ。

いやいや、こっちに居残るつもりだよ。司書にはなれなかったけど、良い職にありつけたしね。ただ、親の事が心配でさ。この機に、こっちに移り住むのも良いかなと考えた訳さ。

ああ、シュトラーフのほうが穏やかだしね。向こうの奴らはせっかちだらけで、どうもいけない。たいした孝行はできないけど、余生は何事も無く過ごしてほしいんだよ。

ああ？ この荷物がなんだって？ 道中に必要な財布とか、ま、最低限の物しか入れてないけど。

泣き声、だあ？

あー、本を二冊、旅のお供に。しかし、爺さんにも司書能力があるんだな。

いや、本なんて高くて買えやしないよ。これは借り物だよ。勇者が世界を魔の手から救う、って話でさ。すげえ長い物語で、これはその中の二冊なんだが、全部の本を持ち歩くことは出来ないし。

ああ、俺も先が気になって、図書館に頼み込んで持ち出した訳だ。だけど、こうも本が泣き続けるとは思わなくてさ。ちよっと持て余し気味になってきた。捨てるわけにもいかないし。

ああ、ああ。もちろん大事に扱っているさ、心配しないでくれ。

いやー、しかしこの長閑な風景もなかなかだな。なんか崩すのが申し訳ないくらいだよ。

ん？ いや何でもないさ、ただの独り言。気にするな。

□
□
□

泣き声が聞こえた。

それは由々しき事態だ。図書館を運営するものとしては、到底見過ごす訳にはいかない事柄であった。それ以前に、投書によって発覚したとなれば、司書失格と罵られても文句は言えない。

この世界において、本とは国家の誇りでもある。それを紛失したとなれば、やはりお咎めは免れないだろう。

過去には、心無い利用客によって破かれた書物が返却された事があった、当時の司書は、その責を問われて投獄されたという事例もあ

る。

私が管理を怠った罪は重い。それは動かせない事実だ。

けれど、少し言わせてほしい。なんだってうちの館長は仕事が遅いのか。このこのっ。

場所は、二階の奥まった一画。主に創作物語が収まっている書架。シュトラーフ王国においては、創作物語はとても人気が高く、最新刊は常に貸し出された状態だ。

最近の傾向としては、もともと恋人だった記憶喪失の青年にもう一度恋をする女性の物語や美形な一匹狼が送り狼に変身して市井の人々を悪の手から護るべく家まで張りつく話などが、年配の女性や子供をもつ若い女性に人気だ。

それらの書物の争奪戦を防ぐ為、一卷につき五冊ぐらいは仕入れているのだが、それでも足りないくらいだ。

しかしいま問題となっているのは、そういった成人に好まれる類のものではなく、十代の少年少女向けの中の一つの物語だ。

「この書架かな。ああ、ここだね、二冊抜けている。セシル」

「はい」

貸出し帳をめくり、投書があった日と照らし合わせ、更にその前日から一週間遡って履歴を調べる。

「貸出した形跡は、ありません」

「そうか」

うんうんとは唸る館長は、しばらく考える素振りを見せ首を捻った。この二冊ぬけた長編物語は、帳簿にある通りに貸出し頻度が落ちていて、そろそろ引込めようかと検討していた書物だ。

ちなみに、すでにお蔵入りとなっている書物達は、ときどき一階中央フロアに展示し、古書フェアと題して貸出しも行っている。

私は再度帳簿を確認してから、他の所に混ざって置いてないか見て回る。そんな時だった。静けさに包まれた館内が俄かに騒がしくなり、何事かと階段の手すり越しに中央フロアを見下ろした。館長は、響く声に覚えがあったのか、そのまま階段を駆け下りていった。

「それにしても、泣き声で気付くなんておかしな話よね。盗難防止の魔法は本にも書架にも館内にも掛けているのに」

ああ、不甲斐ない。一冊一冊に魔法を掛けているのに、この子達にはとても悪い事をしてしまった。いなくなった子は、今どこでどんな憂き目に遭っているのだろうか。絶対に取り戻さなければ。

「セシルー、まだ二階にいるかいー？　ちよっとお客さんが来たから、一緒に話を聞こう。ん、あれ？　もしかして僕、いま大声だったかな。うわあ、またセシルに怒られちゃうよ。うん？　ああ、セシルっていうのはね、ここの司書なんだけど……。ああ知っているのかい。うん、ちよっと怖いよね、見た目通りに」

失礼なっ！

あら、あらあらあら。もう開館の時間？

まあ、いやだ。まだ階段の手摺りを磨く作業が残っているのに。これでは館長さんに叱られて……。

嫌だわ、あの子ったら。こっちが叱ってやりたいくらいだわ。

昨日、一晩泊まったのは知っているけれど、なんなのかしら、あの身嗜みの無さは。どこに横になったら埃まみれになるのよ。私のお掃除触覚は完璧なはずよ。指で掬い取れる塵や埃なんて、どこにもありやしない。私の自慢は、このお掃除技術。なにしろ、このシュトラーフ図書館の掃除を一手に引き受けているのですからね。大陸一といっても過言じゃないと思うわ。

あら？ セシルちゃんに館長だわ。あの子も大変ねえ、あんな大人の子守は。

うーん、手摺りが気になるけれど、そろそろ引き上げなければ。セシルちゃんのお仕事の邪魔はしたくないし。

ああ、そうだわ。あとでセシルちゃんに、本を慰めるように伝えなければいけないわね。まだ気付いてないみたいだし。帰り掛けにカウスターに寄って行きましょう。

そういえば、ここ数日ハロルドを見掛けないわね。また仕事をさぼっているのかしら。最後に見たのは……、いつだったかしら？ たしか創作物語の書架で見たのよ。本を片手に、なにかぶつぶつ呟いていたけれど、新しい防止魔法でもかけていたのかしら。

でも、変ね？ 防腐や防火に防水、それから日焼け止めに防虫に盗難系の魔法は、セシルちゃんが一通り掛けているはずなのに。あそこで何をしていたのかしら。

□
□
□

「いつ、いたた。痛いよ、セシル。な、なんなんですんなにこやかな笑顔なお」

当たり前です、右耳の耳たぶを力いっぱい抓っているのですから。笑顔？ 良いじゃないですか、笑顔。私だって学習します。先日の見学会での失敗を、明日に活かさなければ。

にこやか、ということはぎこちなさはや引きつった皺は取れているみたいね。

「もしかして、怒っているのかな？ 僕、何かした？ それとも、何もしてないのかな？ ゆ、ゆる、ゆるゆるゆるうー」

そうか、反省はしないのか。左耳も抓ってくれる。

「ぎゃあ、痛いよ。千切れちゃうよう、助けてー」

ええい、泣くなわめくな。口閉じてろ。ああ、そうだ。おまけに、足を踏んでやろうか。

「まあまあ、セシルの怒りももつともだが、それくらいにしといてやりなさい。アルノルトも、セシルを困らせる様な事ばかりしてはいけないよ。君にとつてスキんシップかもしれないが、私個人としても国としても、貴重な司書を、こんな事で失くしたくはない。それに、このままでは話もできないだろう？」

「……国王陛下が、そう仰るのなら」

私は渋々と、館長の耳から手を放す。よほど痛かったのか、館長は解放された耳を擦りだした。

「じゃあ、此処では話し辛い事だから、場所を館長室に変えよう。

さあ、小さなお嬢さん、こちらにどうぞ」

「小さなお嬢さん？」

はて、と首を傾げれば、陛下の背後からひょっこりと顔を覗かせている女の子がいた。

ロッテ！

パパとママ、あとシシィおねえちゃん！

シシィおねえちゃんはロッテのこと、いいこつてたあくさんいってくれるの。だからおねえちゃんだいすきよ。

えー？ シシィとよんでってゆったもん。ロッテは、おねえちゃん
はシシィなの！

ほんとうだつてば、うそじゃないもん！ ほんとうにほんとだもん
……。

……ほんとう？ ううん、いいの。おねえちゃんいつてたの、おこ
りんぼうさんもいるって。

でもね、シシィおねえちゃんは、みんなとおともだちなの。ほんさ
んもおともだち？ わあ、うれしいな。シシィおねえちゃんのおと
もだち、ロッテもおともだちになるよ。それからね、おねえちゃん
のおてつだいもするの！ ロツテ、おうちでもママのおてつだいす
るのよ。

え？ なあに？ あそこにいるこのおとうといもうとをさがすの
？ うん、わかった！ おねえちゃんにおはなしするね。

じゃあいつてくるね。うん、ありがとう、かいだんきをつける。
うん、またあそんでね！

□
□
□

館長に呼ばれて一階に下りてみれば、下々の者が着る服をお召しになった国王陛下と数人の侍従さんがいた。

陛下は気を遣ってください、利用客の邪魔にならない様にと、柱の影でじっと動かずにお立ちになられていた。侍従さん達は遠慮なしにあちこちへと動き回っている。時折、大人しくしろと陛下が叱責なさっているのだが、それに従う様子はない。

そんな光景を館長と一緒に見ていたのだが、その内の一人と目が合った。彼はすぐさま洪面を作り、きつく睨み付けそっぽを向く。なんなのだろう、あの態度は。私、彼の癪に障ることをしたのかしら。

「すまない、アルノルト、セシル。本当は私一人で来たかったのだけれど、事が事だから護衛が必要だと、一步も引かなくてね。これでも譲歩した結果なんだよ」

まるで物乞いの様に彷徨う彼らを見無視し、陛下の提案で館長室へと移る。

その移動中でさえ、物陰で見えなくなるまで冷たい視線が私の背中

に突き刺さった。

「ああ、セシル。なにか甘めの飲み物はないかな？　珈琲や紅茶以外のものが良いのだが。無かったら、砂糖とミルクたっぷりで、こちらのお嬢さんにお出ししてくれ」

「はい、ええと、たしかぶどうとりんごジュースがあったような……。ロツテちゃんは、ぶどうとりんご、どっちが好き？」

「りんご！」

「りんごね。じゃあちょっと待っててね。すぐに戻ってくるから」

「うん！」

「うわ、ま、まって、セシルっ！　りんごは………へぶしっ」

無い、なんて言わせない。ええ、言わせないとも！　けれど、この慌てようは確実に無いのだろう。

おかしいわ。簡易キッチンの開き戸には、交差させて打ち付けた二枚の板と鎖を通した錠で完全武装しているのに。

「ロツテちゃん、ごめんなさい。りんごは無いみたいなの。ぶどうでも良い？」

「……うん。ロツテ、ぶどうもだいすきよ」

ああ、明らかに落ち込んでいるわ。しょうがない、ここは私の秘蔵の焼き菓子をだそう。甘い味付けだから、きつと気に入るだろう。

「せ、セシルさま？　ぶどうも………ごふう」

買ってこい。今すぐりんごとぶどうを買ってきなさいっ！

「アルノルト、さすがに……」

見なさい、陛下が呆れておられるわよ！

「いや、本人を思っただ。ここは確り注意しよう。アルノルト、大人気ないぞ」

「お、おねえちゃんっ。やっぱり、ロツテこーひーでいいのっ。それでみるくとおさとうたくさん。それでね、んとね」

ああ、恥しい。私、本当に恥しいわ。穴がなくても埋まりたい。小さい子供に、しかも女の子に気を遣わせてしまうのって、どうなのよ。いえ、どうもこうも無いわ。やはり、埋めるべきではないだ

ろうか。

陛下が来館なさってから半刻も過ぎていないのに、さつきから似たような事ばかりっ。

「セシル、大丈夫か？　とりあえず、椅子に座ろう。お茶の準備は、落ち着いてからにしよう」

怒りに震える肩を陛下が抱き寄せて、応接用のソファへと誘導する。なされるがままに座り、深呼吸をと言われ、大きく空気を吸い込んだ。

吸い込みすぎて、咽た。

私は、反省をしなければならぬ。

なぜならば、国立図書館館長の座にアルノルトを推したのは、私だからだ。

なんと言えはいいのだろうか。

そうだ、まずは司書のことから話そう。

この国には司書を育てる専門の学舎がある。そこでは書物に関する法律や文学の歴史などの知識、修復作業や防止魔法などの実技を身に付けるのだ。

ただし、技術を身につけ勉強を修めただけでは司書にはなれぬ。学舎を卒業し、文学院が主催する試験に合格しなければ、司書として認められないのだ。

試験は一年に二回行われるのだが、一年に5人の合格者が出れば、その年は豊作と言わしめる程の難関と難問が待ち構えている。これに合格すれば、そのまま自動的に司書課へと配属される。

今現在の司書課は、セシルとあと一人の男しかない。彼も優秀ではあるのだが、勤務態度はそれほどでもない様だ。ああ、そういえば、最近彼を見かけないね。

ふむ……。これは、准司書というものを設置したほうが良いのだろうか。それとも、学舎から……。

おお、すまない。話が逸れたな。そう、問題は彼ではなく、アルノルトなんだよ。

……一国の王が私情を挟むのはよくないと分かっているつもりだけれどね。彼とは古くからの友人で、知り合ったのが司書の学舎なのだよ。

アルノルトは司書を目指し、私はその重要さを学んでいた。司書を目指していた訳ではないが、司書試験は受けたよ。

ああ、もちろん彼も一緒にね。

先程も言ったけれど、五人の合格者がでるかでないかの難問だから、不合格者は大勢いる。私も落ちたけれど、当初の目的とは違うから落胆はしていない。

だけど、アルノルトは……。

彼は、二十年近く試験に落第し続けている。未だにセシルに隠れて、司書試験を受けているのだ。しかも、傾向と対策などというものは、彼の頭の中から抜け落ちているのか、一夜漬けの勉強しかないそう。

……先程言ったとおり、館長に推したのは、私だ。責任もある。アルノルトのどうしようもない性格も知っていたのかと問われれば、知っていたと答えよう。

しかし、彼の司書への情熱と長年の根性を買って……。いや、見るに見かねて、といったほうが正しいかもしれない。とにかく、私情を挟んだ。

だから、全国民にも謝罪しなければならない。

だから、だから……。

小さな賢いお嬢さん、そんな目で私を見ないでくれっ！

□
□
□

咳き込みながらも、苛立った気持ちを無理矢理抑え付け、務めて冷静に振舞う。それには、館長の存在無視する事が重要だ。

「陛下は、なぜロツテちゃんど？」

「見学会の感想を聴きたくてね。今回の参加者達の評判が良かった

ら、第二回目を開催しようと思っている」

「はあ。続ける気なのですか？」

「ああ、そのつもりだが。なにか不満があるのか？」

「いえ……、ない……ような、あるような……」

先日の見学会は、図書館の成り立ちや仕組みを説明するという趣旨だった。

私は通常業務を疎かに出来ないかと断ったのだが、現場の事は現場の者が一番熟知しているという文学院の主張のもと、半ば強引にその役目を押し付けられた。

そして、当日。堅苦しい案内に嫌気がさしたのか、参加者達の半数は野次を飛ばしたり、好き勝手に行動し始めたのだ。本来ならば厳しく注意し、統率しなければいけなかったのだが、慣れない仕事に早々に匙を投げた私は、熱心に話を聴いてくれていた母娘だけの相手をし、他の参加者を無視して見学会を続行した。

その母娘というのが、ロツテちゃんとロツテちゃんの母親だ。私達はすぐに仲良くなり、年齢は離れているけど友達となった。あの日のなかで、一番良い出来事だ。

「まあいい。話を進めよう。さあ、小さいお嬢さん、セシルに本から頼まれた話を話してあげて。このお屋敷の中のことは、セシルが全部知っているから」

「うんっ。あのね、シシィおねえちゃん」

陛下に促されはしたけれど、何か迷っているのか口を開いては噤んだりを繰り返している。

「おねえちゃんっ。ごほんのおとうといもうとをさがすのよ。ロツテ、ごほんにのおてつだいするってやくそくしたの。だから、おねえちゃんといっしょにさがすの」

「本の弟と妹を探すの？」

「うん」

話し易くなる様に、ロツテちゃんの身長に合わせてしゃがんだ。

「あのね、シシィおねえちゃん。ごほんはがまんしているの。おし

ごといっぱいあるからって。だからロッテがお手伝いするってゆったの。ごほんはおとうとといもうとをしんぱいするけど、おねえちゃんもしんぱいな」

小さな身体ながら、言葉を尽くし全身で伝えようとしているのが良く分る。

きつと良い司書になるだろう。そんな確信を抱かせる。陛下に視線を移せば、私と同じ様な確信があるのか、彼女を慈しむような表情をしている。

「私が心配……?」

うん、とロッテちゃんは大きく頷いた。

うふふ、私はなんでも知っているのよ？

嘘なんてついていないわ。名前を教えてください、ですって？

あら、そういえば名乗ってなかったかしら。いいわ、私はバーバラ・ハウスマンよ。まあ、私のことを物忘れの激しいおばあちゃんと言ったのは、この口かしら？

はい、素直でよろしい。

話を元に戻すけどいいかしら。

そう、セシルちゃん以上に情報通なんですからね。

たとえば、簡易キッチンに棚に巧妙な細工と手口で横穴を開けたアルノルトちゃん。

ジュースを飲むために釘抜き片手にうっすらと微笑んでいるセシルちゃん。

そんなセシルちゃんを、遠見の魔法で追いかけていはにやけている国王陛下。

ああ、酒場でセシルちゃんのお尻を触った奴らは、帰宅時に、口ではとても言えない不幸な事が起こったそうよ。男として暫く再起不能のようね。セシルちゃんは知らないけれどね。

ね、なんでも知っているでしょう。

情報源？ あらいやだ、それは言えないわ。乙女の秘密よ。うふふふ。



そうか。私は、心配されているのか。なんだろう、この脱力感。むなしささえ感じる。

本の意味とロッテちゃんの言葉に、あ、だの、う、だの呻き声しか出せなかった。

司書の仕事を苦痛を感じた事がない。むしろ、誇りだ。天職だとも思っている。なのに、本達に心配されるとは、どうした事だろうか。

「セシル、大丈夫か？」

いまの私はさぞかし間の抜けた顔をしている事だろう。水揚げされた魚のように、口をぱくぱくと開閉させる事しかできなかった。

「ふむ、なかなか重症のようだな。水を持ってこようか。小さいお嬢さん、すまないが少しの間セシルをみていてくれないか」

「うん」

「ああ、そうだ。侍従達の一人をつかまえて、ジュースを買ってこさせよう。支払は……」

ドアへと向かう陛下は一旦立ち止り、床に寝そべっている館長を見つめた。

「アルノルトの給料から天引きだな。あとで財務院と文学院に遣いをだそう」

さして広くはない館長室は、応接セットから数歩進めばすぐドアに手を掛けられる。陛下はよっこいしょと、館長の身体を乗り越えドアノブを掴もうと腕を伸ばした時、丁度見計らったようにノックがされ答えを返す間もなくドアが開かれた。

「セシルちゃん、いる？ あらあらあら、これは国王陛下ではございませんか。ご機嫌麗しゅう」

声からして、掃除を頼んでいるバーバラさんのようだ。ここからは、壁が邪魔をして見えないけれど、たぶん普通の態度で挨拶をしているのだろう。バーバラさんは、相手が王侯貴族でも頭を下げたりする事は無い。さすがに言葉は慎重に選んでいる様だが、誰に対しても同じ所作や態度で接する、すごく強い女性だ。

「おや、バーバラさん。いつもご苦勞様だね。セシルなら、ちよっ

と放心中なのだけど、どうかしたのかい？」

「ええ、はい。小さい女の子がいらっしゃるのでしょうか？ 甘い飲み物をおもって。ジュースはアルノルトちゃんが飲み干してしまっているから、新しいのをお持ちしましたわ。あと、少しだけ情報提供を」

「そうか、丁度良い時に来てくれてありがとう。さあ、どうぞ。アルノルトが転がっているから、足元には気をつけて」

陛下は、バーバラさんからグラスなどを乗せたお盆を受取ると、慣れた手つきで飲み物をグラスに注いだりして甲斐甲斐しく私たちの世話をしはじめた。しかし、陛下に下々の世話を焼かせるなんてもっての他だ。私はソファから腰を浮かし、自分でやると言い出しかけたところを、バーバラさんに肩を押さえつけられ、ソファに押し戻されてしまった。

こういう時に男を使わないで、ほかのどんな時に使うの、とバーバラさんの談。

「それで、あの、情報というのは？」

隣にちゃっかりと座ったバーバラさんは、いつものにこやかな表情とは打って変わり、真剣な眼差しで話し出す。

「今朝から本が紛失したって探し回っているでしょう？ 確信は持てないけれど、ハロルドが無断で持ち出したんじゃないかと思って、私、何度か見たのよ。本に向けて、ハロルドがなにか呪文を紡いでいたのを。本の魔法は詳しくないから、はじめは防止魔法かと考えていたんだけど、ここ数日はあの子の姿を見てないし、それくらいだったかしら？ 本の泣き声を聞くようになったのよ」

「バーバラさんも？」

「あら、どうしたのセシルちゃん。そんなに肩を落として」

「いえ……、努力しているつもりですけど、無力だなと思って」

適度な力の抜かし方なんて分らないし、頑張りすぎもよくないらしいけど、やはり頑張らないと。決意も新たに、バーバラさんを見る。

「ハロルド、ですか」

「ええ、ハロルドよ」

確信が持てないと言っていたけれど、その口調ははっきりとハロルドだと断定した。

おほんっ。あーあー。ぐふん。

わたくしは、侍従長である。

名前はあるにはあるけれど、わが陛下にこそ呼んで頂き、はじめて意味を為すものだといえる。

であるからにして、下々の者に軽々しく教えるものではないのである。

しかし、わが陛下におかれては、その御様子は微塵たりともお見かけしないのである。

これは他の侍従達も同じであり、正しく由々しき問題なのである。にも関わらず、わが陛下は、わが陛下はっ！

図書館勤めの平民共にご執着され、名前を呼び、姿が見えないからといって遠見の魔法までご使用されるとは。

ああ、平民とは聞こえがいい、あんなものは下等国民で充分である。しかも、しかもだ。

陛下は、あの下等生物を妃に望んでいらっしゃる御様子。甚だ遺憾だ。

どうしてくれようか。

どうしたらいいのだろうか。件の作品を慰めるべきだろうか。いや、



それは後回しだ。これはやるべき事が決っているじゃないか。

そう、ハロルドだ。

彼を探さなければ。

しかし、住処を訪ねても酒場で情報を求めても情報が皆無だったから、もう城下町には居ないのかもしれない。

では、今すぐに追わなければ。シュトラーフ国内にまだ居るのか、それとも国外へ出てしまっているのか。

ああ、そうだ、国境を封鎖して……。いや、幾ら書物の盗難といえ、国境封鎖は私の権限では遠く及ばない。

「ふむ。では、バーバラさんの情報を元に、彼が持ち出したと仮定しよう。私が彼だったら、もうこの周辺からは逃げいてるね。ということは、いまごろは国境かな。よし、早馬をだそう」

くにざかい、と聞いて陛下を仰ぎ見る。すると、にっこりと微笑みかけられた。

「大丈夫だよ。セシルにはなんの問題も無い。だから、気に病む事なんて無いんだよ。これはハロルドがしたことだ」

幼子にするように、陛下は私の頭を撫でてくれた。

「じゃあ、ちょっとだけ席を外すね。侍従にいつて早馬の手配を……」

懐に手を差し込み何かを取り出そうとしている所に、どたどたと廊下が荒々しく鳴り響き、力一杯にドアが開かれた。

「へ、陛下っ。見つけましたぞ。見てくだされ、この酷い有様を」
そういつて駆け込んだきたのは、陛下に同行してきた侍従の一人だった。突き出された手は、びりばろに裂けた見るも無残な本を握っている。

「これは、件の本ではないでしょうか。このように図書館内にありながら、この女、見逃すとは到底信じられないので御座います。司書の能力を」

息を切らせながら、しかし矢継ぎ早に紡ぎだされる言葉を、私は最後まで言わせなかった。

『拘束します。書法第一条に則り、国王陛下付き侍従を拘束します』

書法。正確にはシュトラーフ王国書物法。

正式名称を口ずさめば威力は増すが、いざ争いの場となれば相手より俊敏に魔法を発動しなければならない。よって省略する事も珍しくはない。

書物法とは、司書が魔力を乗せて口ずさめば、そのまま魔法となり条文の効果を發揮する。

魔法使いが扱う魔法や日常生活に使うちょっとした便利魔法とは異なるもの。

司書だけが、その権力を揮うことができるものだ。

だが、上手く発動しない時もある。それもまた、書物法の特徴であろう。

『拘束します。書法第一条に則り、国王陛下付き侍従を拘束します』

普通なら、どこからともなく鳶や縄の様なものが出現して、対象者に絡みつき縛り上げ身動きを封じるものである。

しかし、今回の魔法は充分に発動しなかった。現れた鳶は足や腕に絡みつくが、まるで水を掴まえたかのようにすうっと通り過ぎていった。うまくその形を捉えたとしても、弱弱しく払う動作をすれば簡単に解けてしまう。

だけれども、拘束されなかった事実でも、侍従にとっては衝撃を受ける出来事みたいだ。

「な、なっ……」

侍従は顔を青褪めさせ、口をぱくぱくと開閉させ言葉にならない喘ぎをもらしている。

『シュトラーフ王国書物法、第一条に則り国王陛下付き侍従を拘束

します』

今度は正しく唱えてみたけれど、やはり弱弱い蔦が二三本絡みつただけだ。

「……………」

その様子には首を捻っていると、横に立った陛下が教えてくれた。
「セシル。彼は、侍従長でね。名前は……、ええとなんだったけな？」

陛下も顎に手をあてて、考える素振りを見せてから首を捻った。

「うん、思い出せないな。前任者との引継ぎの時に聞いた事は聞いたのだけれども、なんだろうね名前を覚える気にならなかったんだよ。こういう事もあるのなら、確りと聞くべきだったね。ごめんねセシル」

いや、私に謝られても、そのなんでしょう。困ります。

「はあ。侍従長ですか。では」

「へ、へいか。我が君っ、わたくしの名は……っ」

『シュトラーフ王国書物法、第一条に則り、国王陛下付き侍従長を、拘束します』

「ああ、いいよ、言わなくても。君はちょっと、いやちょっとどころではないな。無能すぎてね、正直辟易していたんだよ。君の愚かな行為で、私の肩の荷も少しは軽くなるかな」

効果が良く発揮されるように、細かく区切って呪文を唱えてみた。びしっ、とはりのある蔦や縄が侍従長に絡みつく。

あいつ等を拘束、と唱えると、この場にいる誰にでも無差別に魔法が掛かってしまうかもしれないから、対象者の限定を試みたんだけど、役職が変わるだけでも威力がちがうんだなあ。今度研究してみよう。モデルは館長で。

「まあ、陛下。ご英断でございますわ」

「ロツテがのんだおちゃ、にがくてくちがこうなったの」

「……………せしるもへいかもおにだ」

バーバラさんは手を叩いて喜び、ロツテちゃんは目をぎゅうつと瞋り唇を窄めた状態で突き出し、いかにも不味かったという表情をする。

そして、館長がなにかを呻いていた。

「陛下、納得がいきませぬ。ええい、忌々しい下等国民つ、これを解けっ」

拘束された侍従長は、身を振りじたばたともがく。しかし、もがけばもがく程その締め付けは強固になり、段々と身を締め四つん這いとなって床に伏せていった。

「陛下、お頼み申します。ここにある本、実はこの図書館所有のものではありません」

悲鳴じみた声に、陛下は興味を持たれることもなく、懷から取り出した羽をひろげた鳥型の帳面何事かを書きつけていた。

「こ、これはっ、わたくしめが購入しました、ただの日記帳でございます。そ、そうっ。これを引き裂いたのもわたくしでございます」

「へえ、そう。ずいぶんと高級な買い物だったろうね。ああ、セシル。少しだけ窓を開けてもいいかい」

「はい、どうぞ」

バーバラさんが何も言わずにすっと席を離れ、窓を細く開いた。陛下は手にしていた帳面を二つ折りにすると軽く息を吹きかけて、優しく両手で包み込む。それを窓の隙間から外へと飛びたさせた。

「バーバラ、セシル。暫らくしたら近衛が来るから、その男を引き渡しておくれ」

「はい」

「ええ、承知いたしました」

「それから、この本ね。君は先程、この館内で見つけたと言わなかったか」

抗う事を止めなかった侍従長は、ついに腹這いになり脇腹から背中になで蔦に絡みつかまれていた。辛うじて動く首を捻りって頭を上げて、陛下を見上げている。

「そうか、ではセシル。この本は、間違いなく図書館の蔵書になる

ね？」

「はい。図書館内で発見したのであれば、図書館の書物という扱いになります」

「へっ、へいか……」

「ああ、心配しなくとも良い、名もなき者よ。向こうにいる君のお友達も、すぐに君の元へと行くだろう。ああ、なんだか騒がしくなってしまったね。件の本の方は明日にしよう。では、小さなお嬢さん、今日のところは帰ろう。あまりに遅いと、お嬢さんの父上と母上が心配してしまうからね」

しっかりと戸締りをし、ロツテちゃんを呼び寄せると抱き上げて、腕に腰を掛けさせて落下しない様にと、腕とお腹の間でロツテちゃんの足を固定した。

「シシィお姉ちゃん、ばいばい」

「はい、また来てねロツテちゃん」

小さな可愛い手を振りながら、ロツテちゃんは陛下と共に去っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6154x/>

となりの司書さん

2011年11月17日10時43分発行